2024 年 10 月 26 日

JSAS 日本アニメーション学会 主催

日本アニメーション学会賞 2024

選考結果・贈賞式 のご報告

■日本アニメーション学会賞 2024:

『映像作家宮崎駿　〈視覚文学〉としてのアニメーション映画』

米村みゆき 著（2023 年／早稲田大学出版部）

■奨励賞：

『消滅する他者と境界　―相原信洋の日記アニメーションの行方―』

清家美佳 著（東京藝術大学 2023 年／東京藝術大学リポジトリ）

■特別賞：

トーマス・ラマール 氏

日本アニメ研究に関する長年の功績に対して

贈賞式

日時：2024 年 11 月 2 日（土）18:00～18:30

会場：新千歳空港国際線ターミナルビル 2F 会議室「ラベンダー」

※日本アニメーション学会 秋の研究集会との併催です。

選考委員（敬称略・五十音順）

足立加勇（マンガ・アニメ研究者／立教大学等非常勤講師）※委員長

川口茂雄（上智大学文学部哲学科 教授）

佐野明子（同志社大学文化情報学部 准教授）

スティービー・スアン（法政大学グローバル教養学部 准教授）

雪村まゆみ（関西大学社会学部 教授）

[問い合わせ先] 日本アニメーション学会事務局　mail: secretariat@jsas.net

[主催] JSAS 日本アニメーション学会　www.jsas.net

■贈賞理由

学会賞：米村みゆき著『映像作家宮崎駿　〈視覚文学〉としてのアニメーション映画』

著者である米村みゆき氏は、文学研究の領域において、アニメーションを研究対象に取りあげた先駆者として知られる研究者である。氏は、活字による文学作品と同様に、アニメーションの読解・分析を行い、アニメーションを「視覚的文学」と位置付けた。本書がとりあげる作品は、誰もが知るジブリ作品、特に宮崎駿監督作品である。宮崎監督作品は、たとえ、それが原作を持つ作品であっても、宮崎監督独自のストーリー展開が魅力となっている。そのため、宮崎監督作品は良い意味で原作とは別の新たな作品として生み出されているように感じられる。米村氏は、宮崎監督の独自性を語るにあたり、「原作に準拠しつつ添加した脚色」を〈翻案〉の手腕と評価し、それは、文学作品である原作が持つ「行間を可視化」する巧みさに結びつくと指摘する。宮崎監督の作品への思いや制作の背景について、映像はもちろん、他の作品との比較、ロケハン、絵コンテなど、様々な資料を駆使した分析を行うことによって、氏は、アニメーション映画の研究方法を確立しようとしている。本書は、アニメーション作品の新たな解釈を提示する高度な論考であるが、講義録の文体をとって説明されているため、学生や一般の読者にとっても読みやすい本となっている。文学研究においてアニメーション研究方法を確立し、アニメーションの分析的な鑑賞方法を広める本書は、学会賞に相応しいものといえよう。

奨励賞：清家美佳著『消滅する他者と境界　―相原信洋の日記アニメーションの行方―』

相原信洋（1944-2011）は、72 本の個人作品を手掛けた、日本を代表するインディペンデント・アニメーション作家である。また、京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）で教鞭をとるほか、各地でワークショップを開催してアニメーション制作を指導し、教育面においても大きな貢献をなした。しかし、長髪ヒッピースタイルの相原は、教育の場においては、自分自身のために自由に作ることの意義を説き、映画祭においても、作品上映のみでコンペティションに出品しなかった。現在でも、相原の殆どの作品はソフト化も WEB 配信もされていない。そのため、彼の作品群は高い芸術性を認められているにも関わらず、その全貌を俯瞰して検証する研究は無く、忘却されかねない状況にあった。

清家美佳氏の博士論文は、相原の作品や資料を網羅するだけではなく、関係者へのインタビュー調査も行い、さらに相原のテレビアニメの仕事などの諸々の経歴にも目配りして包括的に論じるものであり、アニメーション史の欠落を埋める重要な研究となっている。氏は 2001 年から個人作品の発表を行っているアニメーション作家であり、かつ、商業アニメの動画担当や教育機関での指導の経験も持つという、相原と同様のキャリアを積んだ人物である。氏は、相原の技法にならって試作品を作るという、作家ならではの手法によって、他に類例を見ない、技術的に鋭く的確な分析を実現した。本論文の最終的な目的は「個人によるアニメーション作品制作のあり方を問い、見直すこと」にあり、氏は、自身の内省を丁寧に織り込みながら説得力のある提言を行なっている。こうした一連の取り組みは、作家が作家を研究するさいに有効な研究方法を提示するものでもあり、今後、作家による作家研究を促進させることが期待される。

選考過程においては、一般的な学術論文の形式から外れる部分があることや、分析考察のボリュームがやや少ないのではないかという批判意見もあった。しかし、本論文の「アニメ」と「アニメーション」を架橋する視点や研究テーマの重要性は、研究者とクリエイターの双方に広い有益性を持つと評価され、選考委員会の総意として奨励賞に選ばれた。

特別賞：トーマス・ラマール氏「日本アニメ研究に関する長年の功績に対して」

トーマス・ラマールの長年にわたるアニメーション研究に対する貢献は広く知られている。日本学の研究で評価されていた氏がアニメ研究に取り組み始めたのは 90 年代のことであった。英語圏では、アニメが研究対象としてなかなか認められなかった時代のことである。2000 年代初頭に、氏はトップクラスの学術誌 Japan Forum にて、アニメの特集を組み、編集に携わるだけではなく、自らも寄稿を行った。本特集号に掲載された諸論文、及び、氏自身の論文は、英語圏のアニメ研究において重要視されるものとなり、今も引用され続けている。その後、氏は、特集号の論文の内容を発展、拡大させた著書『アニメ・マシーン―グローバル・メディアとしての日本アニメーション―』を発表した。テレビアニメと劇場用アニメを題材とし、シネマティズムとアニメティズム、そしてアニメーションのスタンドとコンポジティングについて論じた本書は革命的な一冊となった。それは哲学的ですらあり、これほどまでの新鮮な理論を提示した研究者は世界的にも稀といえよう。本書の発表によって、アニメ研究の学術レヴェルは向上し、アニメーション素材・思想・イデオロギー・近代―ポストモダン、様々な角度からの分析が行われるようになった。そして、日本語版の発表を契機に、日本のアニメ研究においても氏の研究は高い評価を受けるようになった。現在では『アニメ・マシーン』は、繰り返し参照される基礎文献となっている。

また、氏は著作だけではなく、Mechademia の編集委員を長年にわたり務めてきた。Mechademia は、アニメ、マンガ、ゲーム、そしてファン文化研究の最先端をゆくジャーナルであり、これらの研究の牽引役となっている。さらに氏は、最新のものだけではなく、歴史的な問題にも目を向けており、今村太平のアニメーション研究に対する考察も行っている。そして、昨年度日本語版が発表された『アニメ・エコロジー』は、テレビ研究をアニメーションの視点から論じるというユニークな論点を提示し、アニメーション研究を他分野へ広げるアプローチとして高い評価を受けている。

ラマール氏の研究は、アニメ研究の世界に、新しい方法論をもたらし続けるものであった。ラマール氏の長年にわたる功績は、特別賞に相応しいものであるといえよう。

■日本アニメーション学会賞について

「日本アニメーション学会賞」は日本アニメーション学会（1998 年創立／www.jsas.net）の創立 15 周年記念事業として 2014 年に創設されました。

「日本アニメーション学会賞」は主としてアニメーション研究者の顕彰・奨励を目的としております。またその授賞対象は会員に限らないものとしました。これは現状においてはアニメーションあるいはメディア芸術の分野における顕彰・奨励が伝統的な分野とは異なり作家・クリエイター中心であり、創り手以外の研究者や教育者・批評家などへの顕彰・奨励の機会はごく限られたものであるからです。本学会員の間でも、かねてよりこれを解消すべき大きな課題であるとする意見が少なからずありました。

本学会がこの賞を設けることにより、若手研究者の奨励も含め、これまで顧みられることの少なかった研究者の顕彰を実現させたことは、学会としての社会的使命の一つを果たすことに繋がるのではないかと考えます（なお、学会賞の設置から 10 年の節目に「奨励賞」の対象を学位請求論文、学術誌への初掲載論文、書籍などの最初の刊行物、に改定しました）。「日本アニメーション学会賞」がアニメーション分野あるいはメディア芸術分野の学術研究の活性化を促し、その一層の発展に寄与することを本学会員一同、心より願っております。

日本アニメーション学会ではこの賞を本学会会員皆の力で支え育て、末永くまた大きく発展させていきたいと希望しておりますので、関係各位の皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申しあげます。

日本アニメーション学会会長 須川亜紀子

※歴代受賞情報等は、以下をご覧ください。
>> https://www.jsas.net/academic-award.html